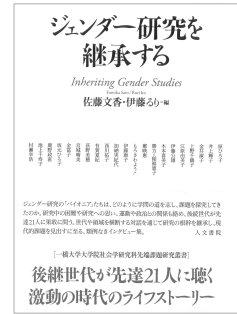


◆書評◆

佐藤文香・伊藤るり編

『ジェンダー研究を継承する』



(人文書院 2017年 ISBN: 978-4-409-24119-6 4800円+税)

山本 千晶

(お茶の水女子大学 生活科学部)

本書は一橋大学における先端課題研究「ジェンダー研究の過去・現在・未来—女性学・ジェンダー研究のパイオニアに対する聞き取り調査を中心に」という3年間のプロジェクトの成果である。ジェンダー研究を継承する若手研究者から“パイオニア”的な役割を担うことになった21人にインタビューをするという形式をとりつつ、「ジェンダー社会科学の現下の到達点と課題群を確認し、今後のあり方を展望する」(本書、10頁。(以下、頁数のみ記す))というユニークな試みである。したがって、インタビュー形式という平易な文章で、かつ21人が次から次へと登場するわけであるので、500頁超とはいえ、気づけばどんどん読み進んでいる。

本書は3部構成となっており、読み方のポイントがそれぞれの総説において示してある。第I部「新しい学問の創出—女性学・男性学・ジェンダー研究」では、女性学・男性学の創始者と社会学領域にジェンダーの視角を持ち込んだ研究者のインタビューである。9人の顔ぶれを見れば、なじみのある

研究者ばかりなので、自然と読者の関心をひくだろう。ごく簡単な紹介にとどめたい。原ひろ子氏、井上輝子氏、金井淑子氏、上野千鶴子氏、江原由美子氏、伊藤公雄氏、大本喜美子氏、勝方=稲福恵子氏、鄭暎恵氏の9名である。一言だけ付け加えるならば、男らしさの語りが大学で「ボコボコに殴られた」(140頁)ということに始まり、天皇制ファシズムや思想的イデオロギーとの関連でだけ描かれるのは物足りない。せっかく個別にインタビューできるチャンスなので、ぜひ家族や親密圏での関係性における男性性を掘り下げて突っ込んでみてほしかった。

第II部「歴史を拓く—女性史・ジェンダー史・男性史」はフェミニズムやジェンダー概念の登場「以前」から蓄積がある「女性史」に携わる研究者へのインタビューである。「女性史」は、フェミニズム理論やジェンダー概念から当然のように出発した私のような研究者にとってはなじみの薄い領域であるだけに、この第II部は個人的にもっとも興味深かった。例えば西川祐子氏は既存の

研究や論争に対して違和感をもちつつ、「うまく説明できなかった」(304頁)「どう言い返していいか分からなかった」(312頁)エピソードが一つ一つ語られる。しかし転機は訪れる。「ライフヒストリーを聞かせて」と言っても自分はそんなに偉くないと謙遜する女性たちが、「引越し歴を教えて」と言い換えたとたんに話が止まらなくなるという。そこから、個々人の引越しの歴史を集めれば「社会変動が浮き上がってくる」ことに着目するのである(316頁)。これまでの政治史の視点へのもどかしさが、「生活」という女性たちの生き生きとした「個人史」が詰まった領域へと流れだすことで、歴史を「衣食住など生活史の視点」(316頁)でとらえ直そうとする。まさに、これこそがフェミニズムやジェンダー研究を核心で支える視点の転換だろう。思わず胸が熱くなる。

第Ⅲ部「個に寄り添う—セクソロジーからヒューマンセクソロジーへ」では、セクソロジーを「研究と実践を切り結びながら推し進めてきた」(454頁)2名、池上千寿子氏と村瀬幸浩氏へのインタビューがまとめられている。総説で言及されているように、海外では学問として確立され、Sexology/Sexuality Studiesとして学位を取ることができる(459頁)。2人のインタビューを読むと、なるほど、Gender StudiesではなくSexuality Studiesとして確立していく必要性を痛感できる。すなわち、「ジェンダー研究」を冠した本書に所収することは、本来は日本のアカデミズムの遅れをも示しているかもしれない。2人の研究と実践は、ジェンダーとは切り離せないが、だからと

いってその視点と方法論をジェンダー研究に回収することにも謙虚であらねばならないことを喚起させる。とくに池上氏はフェミニストではなく「セクソロジスト」と呼ばれることにこだわる。それは、『セックス&ブレイン』を翻訳したときに、あるフェミニストから「脳の性差を調べるような研究を訳すとは何事だ」と非難された経験に由来する。それに対して池上氏は「性差を調べちゃいけないというのは科学じゃないでしょ」(467頁)と主張する。脳や性別分化の発達プロセスを丁寧に調べることは、性差を固定化することではなく、まったく逆に「生物としてのヒト」の多様性へと科学的に視野を開いていくことであろう(474頁)。しかし、このようなセクソロジーを経由した「多様性」は、ジェンダー研究の中で主張されてきたような言説の側面を強調する「セックス」の捉え方とは関連しながらも、やはり異なるのではないだろうか。第Ⅲ部はそういったセクソロジーとジェンダー研究の緊密でかつ緊張もはらむような関係性をじっくりと考えながら読む楽しみがある。

本書全体において「偶然」という言葉は間違いなく頻出単語である。何度もこの言葉や関連する言い回しを目にする。「偶然の選択しか許されてなかったような世代なのかもしれない」(勝方＝稲福200頁)、「そのかさ、押し付けられてやり出したら、また面白くなってしまった」(大本172頁)等々。おそらく、ジェンダー研究にかぎらず、研究テーマとの出会いは少なからぬ偶然の積み重ねなのだろう。しかし、さまざまに押し寄せる「偶然」の波からつかもうとしたものが

女たちの問題であったということが、まさに生い立ちや経験に裏打ちされているということの重みを、本書を読んで痛感させられた。「したくなかった。ないけど……逃げられるわけにはいかない、しないわけにはいかない」(西川 319 頁)。自分自身や周りの女性たちの差別の経験が彼女たちの研究を駆動した。自身の経験に由来する問題関心を足場としながら、誰にも起こり得る「偶然」の中から、女性たちの問題をつかみとってきた、その積み重ねがジェンダー研究へと連なってきたことに思いを馳せる。その一方で、ジェンダー研究をするという「選択」が可能となった私たち世代はどうだろう。伊藤康子氏は逆にインタビュアーに問いかける。「生きにくいから女性史を調べよう、学ぼうとした。今の世代は、女性だから生きにくいとっているのでしょうか」(273 頁)。たしかに、選択の一つであるという意味で、パイオニアたちを駆動してきた切迫さはないかもしれない。でも、女性である(あるいは男性である)ことの生きにくさを無理に強調しなくてもいいと思う。そして、そのことを素直に喜び、選択の自由を与えてくれたパイオニアたちに感謝をすればいい。切迫さはなくても、ジェンダー研究はこれからも着実に進んでいくだろう。パイオニアたちが切り開いてくれた道がすでにあるのであり、それは決して退行することはないのだから。

とは言いつつも、“既存のディシプリンがないってやっぱり不利だし、ジェンダー系以外の学会だとバシバシ劣等感感じちゃう

よね”というみなさんへ、金井氏「やっぱりどれもダメね。何もない」(86 頁)と荻野美穂氏「自由にできる反面どこにも属してない」(354 頁)のインタビューをぜひ。

最後に、「はじめに」ですぐに言及はあるものの、やはりあえて指摘しておきたい。本書は社会学と歴史学を中心とし、「政治学や経済学、法学をはじめ対応できなかった重要分野は多々ある」(15 頁)という限界をもつ。それはまさしく社会学が理論面を牽引してきたという日本のジェンダー研究発展の特徴を反映している。法学者や政治学者が入っていないことはジェンダー研究者にはもっと真剣に受け止められてもいいだろう。ジェンダー研究は「学問の変革」を緻密にまで議論しながら、一方で「社会変革」をどれほど達成できたであろうか(20 頁)。「学問と運動の往復に対する集合的意思」(22 頁)を意識しながらも、「政府や議会や審議会の中に入って改革を」するというスタンスへの「保守化」「体制内化」といういわばありきたりな批判にからめとられて、暴力や困難に直面する女性たちの「現実」を十分にくみ取ってこなかったのではないか。DV や性暴力の問題に携わるようになり、法律があることがどれほど影響力を持つかを実感する一方で、法律をつくり改正することがどれほど困難な作業であるかを思い知る。「わたしはポリティカル・アニマル」「批判する方はどうぞってなもんですね」(44 頁)という原氏から、そのたくましい精神を継承したい。

(掲載決定日：2018年4月4日)